

はじめての海外旅行

—アンデス—

米倉伸之

私のはじめての海外旅行は南米のアンデスだった。1970年10月から1971年2月までの5ヶ月間をペルー、チリ、アルゼンチンのアンデス三国で過ごした。東京都立大学の貝塚爽平さん、野上道男さん、東大地震研の松田時彦さんと私の4人で、アンデスの地震と地殻変動の研究のために、文部省の科研費で海外学術調査にかけた。1970年5月におきたペルー地震によって、コルディエラ・ブランカの主峰ワスカラン（海拔6,768m）の岩壁と氷河が崩落して、大土石流が発生し、山麓のユンガイ町（人口2万人）が一瞬にして吹きとばされてしまった。ペルーに着いて首都のリマからはじめて野外巡検にいったのがこの地域だったので非常に印象的だった。海岸から車で一気に海拔4,000mの山地まで駆けのぼったときは、高山病になりかけたが、数日後には4,000mを越す場所での調査をすることができた。コルディエラ・ブランカの山々は海拔5,000m以上には現在も氷河が分布し、山腹から山麓にかけては氷河地形が発達している。コルディエラ・ブランカの西斜面はサンタ河の河谷に面して比高2,500~3,000mに達する断層崖である。山麓に分布するモレーン（堆石堤）を切断する低断層崖の地形・地質学的調査をした。コルディエラ・ブランカ沿いの断層は1970年のペルー地震のときには動かなかったが、約1,3万年前のモレーンが25mも上下にくいちがっている所もあり、平均変位速度は約2m/1000年に達する活動的な断層である。

チリーでは、1960年のチリー大地震の際に約1mほど隆起したチリー中部のアラウコ半島とその沖合のモチャ島などで海岸段丘の変形について調査をした。この地域では歴史時代にたびたび大地震が発生している。チャールズ・ダーウィンはビーグル号で、南米西岸を調査中に、ヴァルディビアの街で、1835年2月20日のチリー中部大地震に遭い、コンセプション付近での地震に伴う隆起や津波の被害について「ビーグル号航海記」に詳しく記述している。そして「この地震の最もいちじるしい影響は陸地の永久的な隆起であった。それは原因といった方がおそらく正しいかもしれない。」と述べている。チャールズ・ダーウィンはチリ北部のコキンボ付近で海岸段丘を観察し、またサンチャゴからメンドサまでアンデス山脈の横断旅行をして、アン

デス山脈の隆起についても正しく理解していた。アンデスの西麓は、アタカマ砂漠のような乾燥地域であり、ペルーアンデスの東麓はアマゾンの熱帯雨林地域であって、アンデスを横断する旅は、海岸—高山—内陸低地へと変化していく自然景観を楽しむことができた。

私は、1970~71年の旅行に次いで、1972~73年にかけてもペルー、チリ、ボリビア、アルゼンチンで4ヶ月をすごした。この二回の旅行によって、8,000kmに及ぶ長大なアンデス山脈のごく一部ではあったが、アンデスの自然を学ぶことができた。アンデス行きは私の自然研究の重要な転機であった。アレキサンダー・フンボルトやチャールズ・ダーウィンをはじめ、多くのナチュラリストたちがアンデス山脈の魅力にとりつかれており、アンデスは彼らのナチュラル・ヒストリーの重要なフィールドである。私はその後、サンゴ礁の研究へと転進したが、アンデスを再訪する夢をもちつづけている。

「ナチュラル・ヒストリー」とは、地球の自然と生物のありさまとなりたちを明らかにしようとする学問あるいは趣味のことをいう。「博物学」と訳されていたことが多いが、「自然誌」あるいは「自然史」と訳す人も多い。地球上の生物（それには人類も含める）が、どこでどの様に生きているか、生物と環境との関係をたずね、あらゆる生物の多様な姿をくまなく記載しようという姿勢（空間的視点）からみれば、「自然誌」という日本語は適訳であろう。生物の現在の姿は、現在の地球の環境に適応しているだけでなく、地球の歴史にしたがって変化してきた自然環境とともに生物は進化してきた。生物のなりたちを地球史の中で理解する、という歴史的視点を重視すると、「自然史」という言葉が重要な意味をもってくる。人類が誕生してから500万年といわれ、現人類（ホモ・サピエンス・サピエンス）の成立は最近の10万年間と考えられている。その10万年間のうちかなりの期間が最終氷期の寒冷期であった。約1万年前以降地球は後氷期とよばれる現在のような温暖な気候となった。この時代になって、農業革命により人類は自然から自立しうる道を確保した。いわば地球全体に拡散した人類は今や温暖な気候環境下で“ひなたぼっこしている”わけである。人口の爆発的な増大と

工業化・都市化によって、人類は世界的な自然破壊と環境汚染を拡大しつづけている。今こそ、我々は自然について正しく学び、人類と自然との関係を望ましい姿に再調節する必要があるのではなからうか？「自然誌」と「自然史」を両輪として、人類と地球についてあらた

めて学びなおすことが我々にとって必要なのではあるまいか？アンデスの思い出は遠くなりつつあるけれど、アンデスからみた地球の姿はますます自分に迫りつつある。

(東京大学)

赤坂 今昔

鈴木陽子

先日、我が母校がテレビに映ってとても懐かしかった。懐かしいといっても校舎は最近建て替えられたので馴染みがないのだが、校庭の隅にある大銀杏と、その下の記念碑が30数年前と同じなのである。母校即ち東京都港区立氷川小学校は赤坂6丁目にある。最近の赤坂境界の変貌は著しいと聞いていたので、一日思い立って出かけてみた。

氷川小学校は勝安房守(海舟)の屋敷跡に建てられており、記念碑というのもそのことを記したものである。大銀杏は高さ11m、樹令200余年ということなので、海舟も朝な夕なに見上げたのであろうか。赤坂一帯は、明治期軍族屋敷が多く、氷川小学校の東隣り、現在日本ユニバックがあるところには九條邸があった。九條家の四女節子嬢が後の大正天皇に興入れされた後、使われていたグランドピアノが氷川小学校へ寄贈されていた。九條家の紋入りの立派なピアノは、私が在学中は使われることは決してなかったけれど、講堂の舞台左下に置かれていたのを想い出す。このピアノは今でもあるらしい。

小学校より南東に緩い坂を下ったところが六本木通りで、かつては都電の福吉町停留所があった。現在この通りは、東京オリンピック直前に出来た首都高速道路環状線が頭上を覆い、昔の面影は全くない。小学校一年の春の遠足が浜離宮で、この福吉町から貸切りの都電で5つ目の汐留まで行ったことなど夢のようである。

六本木通りの東側の台地上が現在の赤坂1丁目、かつての霊南坂町で、レンガの尖塔が美しい霊南坂教会があった。この教会は今もあるが、数10mほど北東に移動して建て替えられている。この辺の変わり様は変化の激しい東京の中でも特に顕著なものではないだろう。それは最近アークヒルズという大規模都市開発が

行われたからである。霊南坂の地は、六本木通りと桜田通りに挟まれた、武蔵野台地東端の馬の背状の地形の北の部分で、教会付近が最も高く標高30mほどである。アークヒルズはこの台地の西側の一画を大規模に削り取り、ホテル、ホール、テレビ局、オフィスビルなどを総合的に建設した。その為昔教会の正面の我が家があったところは、崖高で5m以上低くなり、ちょうど現在サントリーホールの位置するところとなってしまった。従って全く新しい広い街路が縦横に走り、近代的建築群に囲まれていると浦島太郎そのものである。ただ、崖を上ると陽泉寺をはじめとする寺々の一画は30数年前のままであり、そのアンバランスに又々驚かされた。そこは虎ノ門の方から続く広大なアメリカ大使館の裏手にあたる。1951年4月のある日、我々近所の子供は何ごとかあると大使館の裏門に走っていった。白い塀の中の道路を進んで裏門から出て来た車に乗っていたのが、連合国軍最高司令官を解任されて帰国する、ダグラス・マッカーサーであった。今になって、その光景が鮮明に思い出される度、なぜ裏門から出て行かねばならなかったのか、不思議な気がする。

アメリカ大使館と道一つ隔てて、現在ホテルオークラ本館が建っているが、ここは明治・大正期の実業家大倉喜八郎の邸宅跡である。第二次大戦で焼失後ホテルが建つまでの10数年間、広大な邸内は近所の我々にとって恰好の遊び場であった。遊び場と言えば、北は山王日枝神社、さらに赤坂見附の弁慶橋を渡って、清水谷公園くらいまで出かけて行った。交通の激しい今では考えられないけれど、昭和20年代の都心には戦災の跡がそのままになっていて、子供にとって好奇心いっぱいの広っぱがまだまだあったのだ。